

## 大学生の不登校に関する基礎的研究(1)<sup>1</sup>

— 大学生の不登校と退学希望の理由の探索 —

牧野 幸志

### **A study on why university students refuse to attend school (1).**

**— A survey of the reason why students refuse to attend classes  
and the tendency for students to drop out of university —**

**Koshi Makino**

#### Abstract

The purpose of this study was to explore reasons why some students refuse to attend classes and to further examine why those and other students decide to all together drop out of university. One hundred and fourteen undergraduate students took part in this survey by completing a questionnaire. The majority of students who took part in the survey were freshmen. Results were as follows : (1) More than half of the students surveyed tend to be absent from school or refuse to attend classes. (2) The main reasons for refusal to attend classes were listed as “dissatisfaction with university life” and “helplessness”. (3) About 60 percent of the students have thought of dropping out of school at least once. (4) The main reasons for students desiring to dropout were “dissatisfaction with university life” and “helplessness”. Finally, further directions for research in this area were discussed.

Key words : university students 大学生, school refusal 不登校, desire for drop-out 退学希望, helplessness 無力感.

#### 問 題

現在、日本の大学においてはさまざまな問題が起こっている。例えば、大学は遊ぶところであるという意識の高い「大学のレジャーランド化」、大学の授業を見なおすための「学生による授業評価」の問題、授業中の私語、居眠り、携帯電話の使用など大学生のマナーの問題、受験生の負担軽減の目的で行なわれた受験科目の軽減による大学生の「学力低下」の問題などがあげられる。近年は、社会的ルールを逸脱した若者による事件や大学生の基礎学力の低さを嘆く大学教員らの提言により、学生のマナーの問題や学力低下が注目を集めている。その一方で、まだ、あまり取り上げられていない大きな問題の1つに大

<sup>1</sup>本研究は、平成13年度高松大学教育研究経費配分による共通研究費の援助のもとに行われたものである。

学生の「不登校」がある。不登校とは、「何らかの理由で学校に行かない、あるいは行くことができない」をいう。従来、小中学校においては、不登校（登校拒否）が問題となっており、学校と保護者との連絡、スクールカウンセラーによる児童・生徒とのカウンセリング、カウンセラーと保護者とのカウンセリングなどさまざまな対応が行なわれてきた。現在では大学においても、不登校、つまり、大学に行くことができない、あるいは行かない学生が存在している。しかしながら、日本においては大学生の不登校の詳細な現状はいまだ明らかになっていない。大学生の不登校が大きく取り上げられない理由は、まず、大学は遊ぶところという従来の意識が強く、行かなくてもよいという認識が大学生自身にも大学にもあるからである。次に、大学教育は高等教育の場であり、義務教育とは異なる。したがって、強制的に登校する、登校させるという義務がないことがあげられる。しかしながら、不登校の大学生の中には、授業には出ないけれども部活やサークルを楽しむ、あるいはバイトに興じるという学生もいる中で、不本意入学や入学した学科などへの不適応などから学校に行きたくない学生もいる。後者は、家庭内暴力や引きこもりなどを引き起こす可能性もあり、また、不登校による引きこもりなどから神経症などを起こすケースもある。したがって、大学生の不登校の現状について知ること、そして、どのような理由があるかを知ることが不登校への対策を検討するためにも非常に意義があると考えられる。

日本においても、小中学生の不登校に関する研究が数多く行なわれてきた（古市，1991；本間・中川，1997；森田，1986）。総務庁（1999）の発表によると、小中学生の不登校の児童生徒数（年間30日以上）は、1991年度小学生12,645人、中学生54,172人であったが、1997年度には小学生20,765人、中学生84,701人と急増している。これらの結果は、小中学校において不登校が早急に対応すべき問題であることを示しているが、日本全体からすると小中学生の欠席率は2%前後である（本間，2000）。これは、欠席率8%程度のアメリカ（U.S. Department of Education，1996）と比べると、非常に少ない値である。日本においては学校（ここでは小中学校）に行くのは当然であり、行けないこと、行かないことに対して圧力や罪悪感を感じてしまう。一方、基本的に少人数のクラス担任制をとらない大学では、行かなければならないという圧力を感じることは少ないと思われる。このような点からも、小中学校で起こっている不登校と大学生の不登校の現状とその理由には異なる面があると予想される。

さらに、大学においては、不登校に関連する問題として中途退学者の問題がある。退学の理由としては、不本意入学、入学学部・学科への不適応、大学生活への不適応などがあ

げられる。このような理由により、不登校傾向がみられ、不登校となり、最終的に、退学を希望する学生も多いと予想される。したがって、不登校と同時に大学生の退学希望の現状とその理由についても検討していく必要がある。以上のような問題意識から、大学生の不登校と退学希望の現状とその理由を検討する。本研究は、大学生の不登校の現状を把握し、その不登校の理由を探索することを第1の目的とする。次に、不登校が続いた場合に予想される退学に関して、退学希望の現状を把握し、その退学希望の理由を探索することを第2の目的とする。最後に、不登校傾向、退学希望の理由に男女差がみられるかを検討する。

## 方 法

### 被調査者

被調査者は四国地方の国立大学のAクラスと私立大学のBクラスの受講学生114名（A大学66名，B大学48名，男性71名，女性43名，平均年齢19.46歳，年齢幅18～27歳）であった。被調査者のうち，81名（71.1%）は1年生であった。

### 質問紙の構成

**大学生の不登校傾向** 今までに「学校に行きたくない」と思ったことがあるかについて質問を行なった（1項目）。今まで「学校に行きたくない」と思ったことがあるかについて、「1. 頻繁にある，2. 何度もある，3. 1，2回はある，4. 全くない」に対して，1つを選択してもらった。「4. 全くない」以外の回答を選択した被調査者に対しては，次に続く「学校に行きたくないと思った理由」の質問に対しても回答を求めた。

**大学生の不登校の理由** 本間（2000），岡安・嶋田・丹羽・森・矢富（1992）などを参考にして，10項目の不登校の理由を測定する項目（具体的な項目は後述）を作成した。学生の不登校の理由に関する10項目に対して，「1. まったくあてはまらない」～「5. 非常にあてはまる」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど不登校の理由として当てはまることを示す。最後に，その他に理由があれば書いてもらえるように自由記述欄を設けた。

**大学生の退学希望** 今までに「大学を辞めたい」と思ったことがあるかについて質問を行なった（1項目）。今まで「大学を辞めたい」と思ったことがあるかについて，「1. 頻繁にある，2. 何度もある，3. 1，2回はある，4. 全くない」に対して，1つ選択してもらった。「4. 全くない」以外の回答を選択した被調査者に対しては，次に続く

「学校を辞めたいと思った理由」の質問に対しても回答を求めた。

大学生の退学希望の理由 本間（2000），岡安他（1992）などを参考にして，10項目の学生の退学希望の理由を測定する項目（具体的な項目は後述）を作成した。学生の不登校の理由に関する10項目に対して，「1. まったくあてはまらない」～「5. 非常にあてはまる」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど退学希望の理由として当てはまることを示す。最後に，その他に理由があれば書いてもらえるように自由記述欄を設けた。

### 手続き

いずれの対象授業においても「大学生活に関するアンケート」という形式で無記名で実施した。Aクラスでの調査は，平成13年1月23日授業の後半15分を用いて行った。また，Bクラスでの調査は，平成13年6月21日の授業の後半15分を用いて行なった。調査は隣の学生から回答が見えないように席を離し，個人のプライバシーに配慮した。

## 結 果

### 被調査者の内訳

被調査者内訳についてTable 1に示した。国立大学（Aクラス）と私立大学（Bクラス）の2つの授業にて調査がなされた。対象とした授業は，いずれも選択科目であった。Aクラスにおいては，大学のすべての学部から学生が集まっていた。Bクラスにおいても各学科からの学生が受講していた。したがって，被調査者の抽出方法として問題はなかったと考えられる。被調査者の学年により大学への在学期間が異なっている。Aクラスにおいては，多数を占める1年生は，調査実施時期には在学期間は1年弱である。2年生以上

Table 1 被調査者の内訳

	Aクラス N=66		Bクラス N=48	
	男性 N=34	女性 N=32	男性 N=37	女性 N=11
1年生	55名		26名	
2年生以上	11名		22名	

は2年弱以上の在学期間がある。また、Bクラスにおいては、半数を占める1年生は調査実施時期には在学期間は3ヶ月であり、2年生以上は1年3ヶ月以上の在学期間がある。男女比は、Aクラスで同比率、Bクラスで男性の比率が高かった。被調査者の人数はやや少ないと考えられるが、さまざまな学生からの回答が得られたと推測される。なお、いずれのクラスにおいても2年生以上の被調査者数が少ないため、学年別の分析は行なわなかった。

### 不登校傾向のある学生の割合とその理由

大学生の中でどのくらい割合の学生が、学校に行きたくないと考えているのかという質問への回答の結果をグラフに示した (Figure 1)。不登校に関しては、全体の20%近くの大学生が、「学校 (大学) に行きたくない」ことが「頻繁にある」と回答している。また、これを「学校 (大学) に行きたくない」ことが「何度もある」と回答している学生 (37.7%) と加えると、半分以上 (57.0%) の大学生が、かなりの頻度で学校に行きたくないと考えていることがわかる。

次に、1度でも「大学 (学校) に行きたくない」と思ったことのある学生を対象にして、その理由について回答を求めた。その結果を、理由が当てはまる度合いの高い順にTable 2に示した。大学生が学校に行きたくないと思う理由で、その当てはまる度合いが最も高かったものは「眠いから」であった。以下、「疲れているから」、「授業がおもしろくな

あなたは今までに「学校 (大学) に行きたくない」と思ったことがありますか？

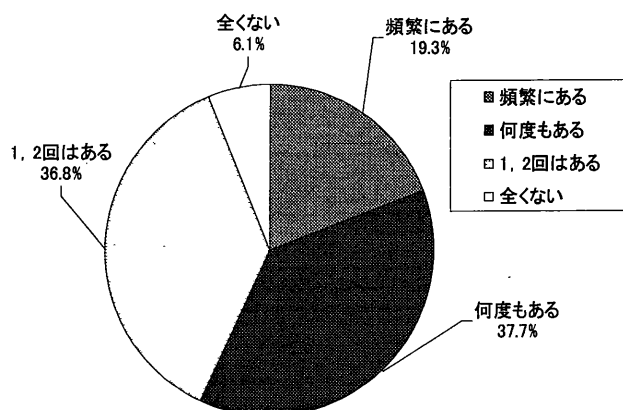


Figure 1. 不登校傾向の学生の割合

いから」，「大学が自分が期待していたものと違うから」，「なんとなく行きたくないから」であった。上位の理由の多くは，大学生自身の無気力あるいは無力感によるものであった。また，「大学の授業がおもしろくない」という授業内容に関する理由もみられた。逆に，友人関係，先生と学生との関係をその理由にあげる学生は少なかった。

### 退学希望の学生の割合とその理由

大学生の中でどのくらい割合の学生が，大学を辞めたいと思ったことがあるかという質問への回答の結果をグラフに示した（Figure 2）。退学希望については，全体の4.4%の大学生が，「大学を辞めたいと思ったことがある」に対して「頻繁にある」と回答している。次いで，「大学を辞めたいと思ったことがある」に対して「何度もある」と回答した学生が8.8%であり，「1，2回はある」と回答している学生は45.6%にも昇った。つまり，1度でも大学を辞めたいと思ったことのある学生の割合は，58.8%となった。

次に，1度でも「大学を辞めたいと思ったことがある」学生を対象にして，その理由について回答を求めた。その結果を，理由が当てはまる度合いの高い順にTable 3に示した。大学生が学校を辞めたいと思う理由で，その当てはまる度合いが最も高かったものは「大学が自分が期待していたものと違うから」であった。以下，「授業がおもしろくないから」，「大学でやりたいことが特にないから」，「他にやりたいことがあるから」，「学生生活（勉強を除く）がおもしろくないから」であった。理由は，大学生活への不満に関

Table 2 不登校の理由の平均値と標準偏差

不登校の理由に関する項目	平均値	標準偏差
3. 眠いから	3.94	1.21
9. 疲れているから	3.67	1.09
1. 授業がおもしろくないから	3.61	1.27
4. 大学が自分が期待していたものと違うから	3.24	1.37
8. なんとなく行きたくないから	3.08	1.37
7. 他にやりたいことがあるから	2.77	1.38
2. 学生生活（勉強を除く）がおもしろくないから	2.69	1.33
10. 行かなくてもよいと思うから	2.54	1.34
6. 友人との関係がよくないから	2.06	1.21
5. 先生との関係がよくないから	1.61	0.83

N=107

するものと他にやりたいことがあるというものに分かれた。退学希望の理由に関しても、友人関係、先生と学生との関係をその理由にあげる学生は少なかった。

### 不登校傾向の理由の探索

不登校傾向の理由の因子分析 大学生の不登校傾向の理由に関する10項目の評定値に対して因子分析を行った（Table 4）。固有値1を基準とする因子分析（主成分法，バリマツ

あなたは今までに「大学を辞めたい」と思ったことがありますか？

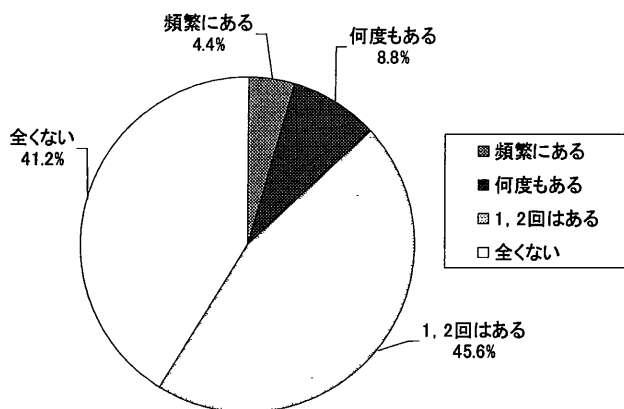


Figure 2. 退学希望の学生の割合

Table 3 退学希望の理由の平均値と標準偏差

退学希望の理由に関する項目	平均値	標準偏差
4. 大学が自分が期待していたものと違うから	3.66	1.20
1. 授業がおもしろくないから	3.37	1.22
8. 大学でやりたいことが特にないから	3.36	1.37
7. 他にやりたいことがあるから	3.19	1.42
2. 学生生活（勉強を除く）がおもしろくないから	3.12	1.36
3. 今の大学が志望大学（第一希望の大学）ではないから	3.07	1.48
9. 何もする気がしないから	2.55	1.26
10. 大学など行かなくてもよいと思ったから	2.34	1.32
6. 友人との関係がよくないから	2.25	1.26
5. 先生との関係がよくないから	1.70	0.81

N=67

クス回転)を行った結果,第1因子は“学生生活(勉強を除く)がおもしろくないから”,“授業がおもしろくないから”,“大学が自分が期待していたものと違うから”など大学生活に対する不満に関する項目に負荷が高かった。したがって,これらを「大学生活への不満」因子とした。そして,「大学生活への不満」を示す5項目( $\alpha=.71$ )の平均を「大学生活への不満」得点として算出した(1~5点,得点が高いほど,大学生活への不満が高い)。第2因子は“眠いから”,“疲れているから”,“なんとなく行きたくないから”など4項目に負荷が高かった。これらは,被調査者である大学生自身の無力な態度を示していると捉えられたので「無力感」因子と命名した。これら4項目( $\alpha=.66$ )の平均を「無力感」得点として算出した(1~5点,得点が高いほど,大学生活に対して無気力であることを示す)。第3因子は“他にやりたいことがあるから”の1項目に負荷が高かった。これは,大学での活動以外に何らかの目標があるために大学に行きたくないという理由であった。しかしながら,1項目だけ独立したため,今回は因子として扱わず,残余項目とした。

Table 4 不登校の理由に関する項目の因子分析の結果

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
大学生活への不満				
2. 学生生活(勉強を除く)がおもしろくないから	.871	-.106	-.003	.769
6. 友人との関係がよくないから	.671	-.133	-.097	.477
4. 大学が自分が期待していたものと違うから	.668	-.034	.369	.583
5. 先生との関係がよくないから	.599	.074	.115	.378
1. 授業がおもしろくないから	.434	.325	.385	.442
無力感				
3. 眠いから	-.198	.743	-.197	.630
9. 疲れているから	-.306	.712	-.172	.631
8. なんとなく行きたくないから	.277	.697	.145	.584
10. 行かなくてもよいと思うから	.067	.614	.434	.569
残余項目				
7. 他にやりたいことがあるから	.025	-.109	.849	.733

N=107



## 退学希望の理由の探索

退学希望の理由の因子分析 大学生の退学希望の理由に関する10項目の評定値に対して因子分析を行った (Table 5)。固有値 1 を基準とする因子分析 (主成分法, バリマックス回転) を行った。共通性が.30以下の項目は削除した。その結果, 第1因子は“学生生活 (勉強を除く) がおもしろくないから”, “授業がおもしろくないから”, “大学が自分が期待していたものと違うから” など大学生活に対する不満に関する項目に負荷が高かった。したがって, これらを「大学生活への不満」因子とした。そして, 「大学生活への不満」を示す5項目 ( $\alpha=.65$ ) の平均を「大学生活への不満」得点として算出した (1~5点, 得点が高いほど, 大学生活への不満が高い)。第2因子は“大学など行かなくてもよいと思ったから”, “何もする気がしないから” の2項目に負荷が高かった。これらは, 被調査者である大学生自身の無力な態度を示していると捉えられたので「無力感」因子と命名した。これら2項目 ( $\alpha=.35$ ) の平均を「無力感」得点として算出した (1~5点, 得点が高いほど, 大学生活に対して無気力であることを示す)。

Table 5 退学希望の理由に関する項目の因子分析の結果

項目	因子1	因子2	共通性
<b>大学生活への不満</b>			
2. 学生生活 (勉強を除く) がおもしろくないから	.773	.046	.600
4. 大学が自分が期待していたものと違うから	.627	.149	.415
8. 大学でやりたいことが特にないから	.623	.467	.606
6. 友人との関係がよくないから	.578	-.525	.609
1. 授業がおもしろくないから	.483	.385	.381
<b>無力感</b>			
10. 大学など行かなくてもよいと思ったから	.083	.817	.674
9. 何もする気がしないから	.069	.453	.606
<b>残余項目</b>			
5. 先生との関係がよくないから	.456	-.016	.208
3. 今の大学が志望大学 (第一希望の大学) ではないから	.435	-.260	.257
7. 他にやりたいことがあるから	-.032	.407	.167

N=107

### 不登校傾向、退学希望傾向の理由の男女差

大学生の不登校、退学希望の理由として抽出された「大学生活への不満」、「無力感」が男女によって差があるかを詳細に検討するため、性別によるt検定を行なった (Table 6)。その結果、不登校に関しては、不登校の理由としての「大学生活への不満」、「無力感」に男女差はみられなかった (*n.s.*)。次に、退学希望に関しては、退学希望の理由としての「大学生活への不満」には男女差がみられなかった (*n.s.*)。しかしながら、「無力感」においては、男子学生のほうが女子学生よりも高かった ( $t(65)=2.10, p<.05$ )。つまり、男子学生のほうが女子学生よりも、退学希望の理由として無力感が当てはまるということがわかる。男子学生のほうが無力な傾向があることが示唆される。

### 考 察

本研究の目的は、大学生の不登校と退学希望の現状を把握し、その不登校と退学希望の理由を探索することであった。また、不登校の理由、退学希望の理由に男女差があるかを検討した。

まず、不登校については、大学(学校)に行きたくないことが頻繁にあるという学生が20%近くおり、さらに、これに大学に行きたくないことが何度もあるという学生を加えると、半分以上(57%)の学生がかなりの頻度で学校に行きたくないと思っていることが明らかとなった。調査を行なった時期に既に不登校になっていた学生、あるいは不登校傾向

Table 6 不登校、退学希望の理由の男女差

	男子学生	女子学生
不登校傾向 (N=107)		
大学生活への不満	2.62 (0.87)	2.68 (0.76)
無力感	3.24 (0.92)	3.43 (0.84)
退学希望 (N=67)		
大学生活への不満	3.19 (0.89)	3.09 (0.77)
無力感	2.64 (1.01)	> 2.12 (0.94)

表内の数値は因子得点、( )内は標準偏差を示す。

注) 不等号は、平均値間のその方向に有意差があることを示す (t検定,  $p<.05$ )。

にある学生は、調査対象となった授業に出席していない可能性があるため、実際にはもっと多くの割合の学生が不登校の傾向にあると思われる。このような不登校になる理由を探索した結果、2つの要因が見いだされた。1つは、「大学生活への不満」の要因であった。この要因は、「学生生活（勉強を除く）がおもしろくないから」、「授業がおもしろくないから」など大学生活全般に対する不満であった。また、期待していた大学と実際の大学とのギャップに不満を感じていた学生もみられた。大学生活自体に不満を感じるため、学校に行こうという意欲がわかないと考えられる。2つ目の要因は、学生自身の無力感であった。学生自身が、「眠いから」、「疲れているから」、「なんとなく」などの理由で学校を休みがちになる傾向がみられた。この要因は、大学生の個人的要因ととらえられ、レジャーランド化しつつあった日本の大学の特徴とも考えられる。最後に、本研究では因子として扱わなかったが、不登校の理由として「他にやりたいことがあるから」という回答をした学生も比較的多くみられた。この理由は、大学に在学する以外にやりたいことがあるという目標を持ったものであり、そのやりたい内容を含めて今後取り上げていく必要があるだろう。

次に、退学希望については、大学を辞めたいと頻繁に思ったことがある学生は4.4%、何度もあるという学生が8.8%であった。また、大学を辞めたいと思ったことが1、2回はあると回答している学生は、45.6%にも昇った。つまり、1度でも大学を辞めたいと思ったことのある学生の割合は、6割近くにも昇り、非常に高い割合であった。実際に、既に退学の意志を持っている学生は対象となった授業に出席していないことが十分に予想されるので、実際にはもっと多くの学生が退学を希望していることが推測される。このような退学を希望する学生の理由を探索した結果、2つの要因が見いだされた。1つは、不登校の場合と同様に「大学生活への不満」の要因であった。つまり、学生生活がおもしろくない、授業がおもしろくないという大学生活全般に対する不満により退学を希望する、あるいは、自分が期待していた大学と実際の大学とのギャップに不満を感じて退学を希望すると予想される。また、2つ目の要因も不登校の要因と類似しており、学生自身の無力感であった。学生自身が、「何もする気がしないから」、「大学など行かなくてもよいと思ったから」の理由で学校を辞めたいと思う傾向がみられた。この無力感の要因は、なぜ何もしたくないと感じるのかという原因の追求が必要である。また、本来は入学しなかったが、「なんとなく入学した」、「親が薦めるので入学した」、「第1希望でないが入学した」などの不本意入学についても調査する必要がある。以上の不登校と退学希望の

理由を総合的に解釈すると、学生が大学生活全般がおもしろくないという不満をもち、さらに、大学生活に無力感を感じているために、学校に行かなくなる傾向が現れ、最終的に退学を希望するということが予測される。

さらに、大学生の不登校傾向の理由としてあげられた「大学生活への不満」と「無力感」に関しては、男女により違いがみられなかった。つまり、学校に行きたくないと思っただことのある学生において、大学生活への不満の程度と大学生活での無力感は、男女で変わらなかった。退学希望の理由としてあげられた「大学生活への不満」に関しても、男女により違いがみられなかった。しかし、「無力感」に関しては、男子学生のほうが女子学生よりも高かった。つまり、学校を辞めたいと思っただことがある学生において、大学生活での無力感は男性のほうが女性よりも高かった。このことは、男性のほうが女性よりも無力感が原因となり、退学を希望する可能性を示唆している。

最後に、本研究の今後の課題として、以下の点があげられる。まず、被調査者の増大である。本研究では選択授業を受けていた大学生を被調査者としたため、抽出方法に問題はなかったと思われる。しかしながら、その人数は114名と少数であった。したがって、本研究の結果を一般化するのには問題が残る。より多くの学生を対象として、調査を行う必要がある。次に、学校差、学年差の問題である。今回の調査では被調査者数が少なかつたため、学校差や学年差については検討していない。学校の特色や学年によっても、学校に行きたくなくなる程度、辞めたいと思う気持ち異なることが予想される。したがって、より被調査者を増やし、この点を詳細に検討していく必要があるだろう。最後に、退学希望の理由の再検討である。本研究では、退学希望の無力感因子の信頼性が低かつた。これは、被調査者の人数が少ないことに加え、退学希望の理由の項目が不十分であったことが考えられる。不登校の理由で取り上げられた「他にやりたいことがある」などの項目を参考にし、学生の退学希望の理由をより詳細に探索していくことが不可欠である。

#### 引用文献

- 古市裕一 1991 小中学生の学校ざらい感情とその規定因 カウンセリング研究, 24, 123-127.  
本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.  
本間友巳・中川美保子 1997 不登校児童生徒の予後とその規定要因—適応指導教室通室者のフォローアップ— カウンセリング研究, 30, 142-150.  
森田洋司 1986 「不登校」現象の社会学 学文社  
岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価と

ストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.

総務庁 1999 平成10年度青少年白書—青少年問題の現状と対策— 総務庁青少年対策本部 大蔵省印刷局

U.S. Department of Education 1996 Digest of Education Statistics. Washington, D.C. : U.S. Government Printing Office.